

高校におけるスクールソーシャルワーク実践から 見えてきた課題

初 谷 千鶴子[※]

本研究は、筆者が高校のスクールソーシャルワーカー（以下、SSW_r）としてかかわった実践を基に、高校のスクールソーシャルワーク（以下、SSW）の課題を整理し、考察することを目的とする。高校の現状としては、中途退学の事由の大半が経済的理由によるものであったり、多問題を抱えた家庭など、生徒本人よりも、環境による課題が多く見られる。義務教育終了後、社会的には自立可能とされている年齢の生徒が利用できるサービスは限られるようになり、自立する社会人を目指し、抱える生活課題を支援するためには、義務教育とは異なるアプローチの仕方も必要となる。高校でのSSW事例や実践から見えてきたミクロレベルの課題としては、生徒の個別支援展開方法の専門性である。メゾレベルでは、学校内での相談体制と、地域連携を通したネットワークの構築である。マクロレベルでは、SSW_rの増員と常勤配置の必要性が考えられる。

キーワード：スクールソーシャルワーク，中途退学，貧困，校内相談体制，地域連携

はじめに

筆者は、全日制普通科高校に週2日配置されているスクールソーシャルワーカー（以下、「SSW_r」とする。）である。SSW_rの配置形態には、単独校学校配置型、拠点校配置型、派遣型、派遣型+（単独・拠点）配置型があるが、筆者の職場は単独校配置型のためSSW_rとしての校内の居場所は確保されており、教員・生徒とも顔の見える関係性が保てることにより、派遣型や拠点校配置型と比較し、校内連携がとりやすいと思われる。しかし、単独校配置型ではあるものの、週2日の非常勤職員という時間的・身分的な制約があるため、地域や行政との連携を築くことが中心となり、生徒個人への継続的なアプローチが難しい状況でもある。本稿では、筆者がSSW_rとして関わった自験例の実践報告により、高校におけるSSW実践からみえる課題の抽出を

※ 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士前期課程、千葉女子専門学校保育科教諭

し、整理をすることを目的とする。

(1) 子ども家庭福祉の歴史的背景

スクールソーシャルワーカー実践活動事例集（2008）¹⁾によれば、1970年代以前の子どもたちが抱える問題は、貧困、疾病が多くを占めていたが、1970年代以降、徐々に校内暴力や不登校、いじめへと変化していった。また、山下（2012：59）は1980年代～2007年におけるさまざまな学校内の問題を以下のように述べている。中学校でおきる校舎設備の破壊や教員・生徒への暴力、バイクの乗り回し、喫煙、飲酒の日常化が社会問題となり、学校現場では荒れる子どもたちを抑え込むために指導体制を強化、校則を厳格化し警察力を導入する方法をとっていた。1980年代中盤には、いじめや自殺が相次ぎ、重大な課題として現れた。そこで「心」の問題に対応するスクールカウンセラー（以下、「SC」とする。）が導入され、教育関係者ではない専門家が学校に入ることとなった。

子どもたちが抱える課題の変化の背景には、生活の場である家族の変容が考えられる。大家族制度の中で緊密な地域社会の相互扶助システムの存在が、徐々に核家族や単親家族の増加へと変化し、地域の支援ネットワークも乏しくなってきた。大友（2015：24-33）は子どもと家庭のおかれている推移と現状、学校の推移と現状について述べている。子ども家庭の現状として、1990年代半ばから上昇傾向にあった子どもの相対的貧困率が2012年には16.3%となり、6人に1人が貧困家庭で暮らしていることになる。また、保護者の子育てで不安や孤立も増加しており、その要因を、経済的問題から社会資源やネットワークにつなげることができないことと、近年の地域社会における協働的機能の低下とし、その結果保護者の精神的ストレスの蓄積や子どもへの虐待につながることを懸念している。

児童虐待も増加傾向にあり、厚生労働省福祉行政報告例（2014）²⁾によると、児童相談所における養護相談145,370件のうち虐待相談は88,931件となっている。1990年の虐待相談件数は1,101件であったが、児童虐待の防止に関する法律が法定化された2000年の17,725件と比較し約4倍となっている。児童虐待の背景には保護者の社会経済的な困難や、孤立、親の未熟、精神的な疾患など複合的な要因が存在しているが、大友（2015）は虐待による子どもの心身の状況と社会性の影響の深刻さを述べている。社会的養護施設で生活する子どもの7割前後に被虐待経験があり（厚生労働省雇用均等・児童家庭局2009）³⁾、その影響として「発達の遅れ」「不登校」「問題行動・非行」が見られるという安部（2011）の調査結果からも、深刻な状況であることがうかがえる。これらのことから非行や不登校などを考える際には、背景にある家庭内の課題も関連づけしていく必要がある。

(2) スクールソーシャルワーク（以下、「SSW」とする。）の根拠と必要性

子どもたちの表面に現われる課題に対し、その現象と特定の個人に焦点をあてるだけの対症療法に留まっていたのでは、子どもたちの困難は解決されない。スクールソーシャルワーカー実践活動事例集（2008）⁴⁾によれば、それは子どもたちの生活環境によっても生じることが理解され、子ども、家庭、地域まで広く視野に入れた予防や連携が必要であることが認識されてきたと示されている。鈴木ら（2009：35）はソーシャルワークを「当事者の内的側面のみに着目するのではなく、周囲の物理的・人的環境にも着目し当事者が“より良く生きる”という自己決定を行えるよう、相談・情報提供・介入・調整・社会資源の開拓や開発など直接的・間接的に支援するといった幅広いパラダイム転換が行われてきている」と述べており、その中で最も立ち遅れていたのが子ども家庭分野であり、これらの社会的ニーズとソーシャルワーク機能（調整、仲介、連携）が合致し、ようやく子どもたちの生活の大部分を占める学校現場を基盤とした支援をSSWが担うこととなった。

学校や社会は子どもに問題が発生すると、その原因を、問題を起こした子ども自身や親に求める傾向が強い。しかし、ソーシャルワークでは問題を個人と個人を取り巻く環境との相互作用に着目し、生活環境を視野に入れた評価（アセスメント）を加えなければ、問題の適切なとらえ方も対処法も見い出せないと考える。また、SSWrは一人ひとりの人間が持っている可能性に着目し、その可能性を発揮できる条件を創出する（エンパワメントをしていく）ことで、子ども自身が自らの問題を解決できる存在となると考える。ゆえに、学校生活を過ごす中で様々な困難に直面している子どもたちの生活の質を高めるための支援には、SSWrが必要なものと考えられる。また鈴木ら（2009：35）は、児童の権利に関する条約第3条「子どもの最善の利益」はSSWrが活動する上で法的根拠となり、常に「何が子どもにとって最善の利益となりうるか」を考慮して活動をする必要性を示していると明記している。

(3) SSWrとは

学校を活動拠点とするSSWrの本格的導入は、文部科学省が2008年度に実施した「スクールソーシャルワーカー活用事業」⁵⁾からである。目的は、「心の問題とともに児童生徒の問題行動の背景に家族や友人、地域社会など、児童生徒を取り巻く環境の問題が複雑に絡み合っているものと考えられる。したがって、児童生徒がおかれている様々な環境に着目して働きかけることができる人材や、学校内あるいは学校の枠を超えて関係機関等との連携をより一層強化し、問題を抱える児童生徒の課題解決を図るためのコーディネーター的な存在が、教育現場に求められている」とされている。

また、佐々木（2012：27）は「SSWrはSSWの実践者であり、虐待や発達上の課題、または文化や価値観の違いなどへの周囲の無理解、いじめ、貧困、制度の不備など、子どもや保護者の課

題認識の有無にかかわらず、子どもが何かの不公正な状況におかれ、教育の権利などを行使できなかったり、発達が阻害されると思われる時、ソーシャルワークの専門性（価値・知識・技術）と教育分野の知識等を用いて介入する。そして、子どもにとって良い生活環境や学校環境を調整し、問題解決や改善、軽減を図る。」と述べている。

既述のようにSSWrとは、児童や生徒一人ひとりのニーズに応じて支援を行うソーシャルワークの専門職である。したがって、ソーシャルワークの専門的な知識と技術、その理念に基づいて行われる必要があるため、社会福祉士や精神保健福祉士の有資格者が適しており、学校・家庭・地域をつなぎ、子ども・家庭・教職員を支える役割を担う。

1. 実践の背景

文部科学省「学校基本調査」(2013)⁶⁾によると、我が国の高校への進学率は98.4%である。思春期でもある高校生時代は社会で自立していくための前段階であり、自ら自分の生き方に真剣に向き合い、進路について悩み考えていく時期となる。したがって自立した社会人を目指す高校教育の中で、同じ10代でも義務教育とは法的な制度が大きく変わる。高校進学はせず就労することや、進学しても中途退学をし、転学、就労、または別の道に進むことを自分で選ぶことが可能となる。総務省統計局「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(H24)⁷⁾によると、高等学校中途退学率は1.6%である。事由としては学業不振7.6%、学校生活・学業不適応40%、進路変更33.3%、経済的理由1.6%、問題行動等5.7%となっている。その中でも、経済的理由の具体的な状況として、授業料の滞納が39.7%を占めている。福岡(2013: 3)も述べているように、貧困問題は義務教育時期から継続していることが多いが、突発的に保護者の疾病や失業等で起こることもある。アルバイト収入を家計の足しにしたり、学校の諸経費、定期代に充てる生徒も少なくない。家計を助けるほどのアルバイトと学業の両立は難しく、欠席がちになったり収入を得ることで今が楽になる近道を選び、中退をしてしまう生徒もいる。将来の安定した生活に必要な高卒資格を得るためには、多くの困難がある。朝比奈(2011: 41)は、「教育困難校の保護者を見ていると、貧困の根源は短い期間内の問題ではなく、前の世代あるいは数世代にわたっての貧困の存在を感じる。」と述べている。また阿部(2011: 150-151)は、「親自身の学歴に対する価値観や、親の持つ文化が子どもに継承されるとして、意識の上での格差（努力、意欲、希望）」について紹介している。

また、生徒がどのような経緯でSSWrと出会うのか、筆者の勤務校での例を説明すると、まずニーズ発見者としての教育相談担当教員の存在がある。勤務校の教育相談担当教員は、全ての生徒を把握するため、毎年1年生の副担任をしている。そして、各学年の担任がつぶやく内容や生

徒の表情から必要性をキャッチし、SSWrに要請をする。内容によりSCにつなぐ場合もあるが、SSWr、SCでケースの共有や役割分担をしている。要請を受け、SSWrは予約制で生徒と面接をする。生徒自身が、SSWrとの出会いを求め直接来訪するというしくみにはなっていないため、全てのニーズをキャッチできているとは言い難い。生徒との面接や地域連携の進捗状況については、生徒の意向として「学校に知っておいてもらいたいこと、知られたくないこと」等を確認した上で、不利益にならないよう対応し、生徒や学校にSSWrの仕事への理解を深めている。週2日のSSWrだけでは、授業で多忙な教員との密な関わりは難しく、生徒の異変もキャッチすることは不可能である。ニーズ発見者の存在があつてこそ、タイミングを逸せず円滑な支援が可能となるが、全ての学校にこのような人的機能が整っているわけではなく、誰もリファーする人材がおらず、担任が生徒の困難を抱えたままの状況も多いと思われる。

(1) 具体的な実践事例

筆者の勤務校における具体的な実践事例を取り上げるが、倫理的配慮から個人が特定されないようデータに修正を加えるということで、事例の登場者には了承を得ている。

①家族との折り合いに悩むAへの支援

Aの家族構成は、母、中学生の妹2人、小学生の弟2人と祖母の7人家族である。父はAが小学校1年の時に死亡し、精神障害を持つ母が一人で子育てをすることは困難なため、すぐに祖母が同居することになった。母の病状は不安定になると徘徊や奇声をあげる等、近隣でも噂になっており、妹や弟たちは母のことを友達からからかわれることもあった。祖母は同居した時から「キチガイの子と言われないう、しっかり育てよう」と決心し、今日まで厳しくしつけてきた。Aが高校に入り、他のきょうだいたちも難しい年齢になると、祖母への反発が激しくなり、祖母ときょうだい、きょうだいと母の間で暴言暴力も生じるようになった。Aはその状況に心を痛め「どうしたら7人が仲良く暮らせるのか」とSSWrのところへ相談に来る。母の病気について尋ねると理解しておらず、祖母からは「キチガイの病気」としか聞かされていなかった。SSWrは母の病気を理解することで、生活の仕方や家族に与える影響も変化すると考え、勇気をもって祖母に聞いてみることを勧めた。その結果「統合失調症」であることが判明したので、統合失調症を親にもつ子どものために作られた絵本⁸⁾と一緒に読みながら、実生活と照らし合わせ考える時間を設けた。「今までずっと、お母さんの病気が悪くなるようなことをしていたかも」とつぶやく。病気のことを知らなかったこと、誰も悪くないこと、家族はみんな必死で生活していたことを生徒に確認し、今後の生活について一緒に考える。母の病気に関しては、医療機関にいる精神保健福祉士の存在を説明し、SSWrが仲介しAが困りごとを相談する流れをつくる。家族との関係性に関しては、A自ら「私が家族会議を開き、お母さんの病気について説明し、みんなにわかって

もらう。」「お母さんもおばあちゃんもきょうだいも、病気のことがわかれば無理なことはしないと思う。」「お母さんが薬を捨ててしまう時には、精神保健福祉士に相談してみる。」「おばあちゃんの負担を減らすために、弟や妹にも家事を分担するよう話してみる。」と、今後の生活に対し前向きに考えようとする姿勢が見られるようになったことが確認できた。現在母は入院中であるが、家族全員の意向と精神保健福祉士を中心とした退院プログラムの中で、退院後は母と子どもたちの生活を築き、祖母は見守ってもらう方向で今後の生活準備を進めている。SSWrとしては、関係機関と連携をとりながら、Aとの面接を通し現状の把握や、やれていることを認めAの自己肯定感を高めつつ、A自身が今後の進路も考え、安定した生活が維持できるよう努めている。

②家族間調整が必要な18歳直前のBへの支援

保護者と折り合いが悪く、家出をしてはSNSで知り合った男性宅を泊まり歩く17歳8ヵ月の女子Bに関しては、電話、訪問、置手紙をしても保護者と連絡が取れず、本人自身が事件や事故に巻き込まれる危険もあるため、SSWrが少年センターに相談をする。併せて、児童相談所にも相談をし、家族間調整の協力を依頼する。その結果、保護者、児童相談所、学校が何回か話し合う機会を持つことができ、保護者と歩み寄ることが可能となった。児童相談所より、生徒の思いの受け止め方や関わり方の指導を受け、保護者のBに対する関わり方に変容が見られるようになると、Bの外泊も無くなった。しかし不調の親子関係が短期間のうちに全て改善されることは難しく、再び繰り返されるようになってきた（児童相談所は指導終了）。児童相談所指導終了前のケース会議において、「とにかくBの話をよく聴いてくれる人をつくってください。特定の人とじっくり話をすることで居場所が感じられるようになります。」という助言を受けていたため、2週間に1回、SSWrがBと面接を継続することになった。欠席、無断外泊という問題行動は再発していたものの、卒業までの数ヵ月間の予定を組みBに渡すことにより、「この日はSSWrに呼ばれているから、面倒だけど学校に行ってみるか」という登校刺激につながることもあった。最終的には「高卒資格が欲しい」思いが強まり、自ら登校し補講を申し出、卒業することができた。面接内容としては、無断外泊や欠席を繰り返すBの安全確認を第一としたが、それ以外はBからの話（異性、家族、学校他）を十分に聴いた。SSWrからは、いつも泊まる所を捜さなければならない不安や、妊娠の心配を抱えた生き方についての問いを投げかけたただけであったが、3回目の面接で「とりあえず、家に戻ろうと思う。」と言う。4回目の面接では「親は自分のことを無視するけど、食事もベッドもあるからそれで十分」と言う。SSWrが「親が無視というのはBが話しかけても知らんふりをするのか、それとも会話ががないのか」尋ねると、Bは「どっちだろう」と首をかしげる。2週間後の面接までの宿題として、「親とまじえた言葉を覚えておくこと」を提案する。5回目の面接では「会話にはならないが、言葉でのやりとりはたくさんあった。」と答える（例えば「いただきます」「どうぞ」「ごちそうさま」「はい」「起きな!」「眠い

よ」)。親との言葉のやりとりの多さに気づいた点と、家庭で過ごしている点を認め、次回が面接最後であることを伝える（卒業のため）。6回目最終面接では「うちの親は私のことが嫌いで冷たいのではなく、不器用な人みたい。友達の親みたいに上手く喋れないから、子どもに誤解されるのだと思う。」と言う。詳しく聞くと「卒業試験の日や、起こされなくても学校に行けた日の夜は、デザートが出るのがわかった。言葉で言えない親の気持ちなのかなって思った。」と言う。「それが理解できるなんてずい分大人になったね。言葉ってとても大切だけど、どうしても苦手な人もいる。相手の気持ちを理解するって難しいね。」とSSWrが言うと「それがわかるのに18年かかった。」と笑顔で答える。今後については「しばらく親元で暮らし、アルバイトをしながら自立のための資金を貯め、気持ちが変わらなかつたら保育士の学校に行きたい。」と語る。

③社会的養護下で育つ生徒のサードプレイスの支援

施設職員でもない、教員でもない立場のSSWrが、日々の出来事を聴いたり会話を楽しむことで、児童養護施設等から通う生徒の居場所の一つ（サードプレイス：自宅や学校とは隔離された居心地の良い第3の居場所）とする。特に高校に入り、自分が施設入所児ということを周囲にカミングアウトしていない生徒に関しては、サードプレイスの必要性が高い。社会的養護下にある子どもたちは、高校生になるとある程度の自由を手に入れるが、広い地域や様々な環境から集まってくる同級生と関わることを通し、自分が置かれている環境との違いに改めて気づくことも多い。具体的には、まず携帯電話があげられる。現在はほぼ全員に近い生徒が携帯電話を所持しており、入学直後からお互いの連絡先を交換し合うことが当たり前のように行われている。部活動では1～3年を通した連絡先交換が必須になっている。そのような中で、携帯を持っていない児童養護施設の生徒は居づらい思いをする。相談室に来て「みんなに何て言ったらいいかなあ」「施設長に携帯が欲しいと言ってもダメって言われるだろうし」とつぶやく。生徒とSSWrで当面の友達対応策とし「親が厳格なため、まだ持たせてもらえない」という言い方を考える。そして、施設に対しては「禁止の理由が納得できるものなのかきちんと尋ねること。物理的に難しいのか、約束を守れば可能になることなのかをじっくり話してみることが大切である。」ことを生徒に伝える。時には施設の約束（門限、携帯、小遣い等）を縛りととらえ、さらなる自由を欲し、施設を飛び出したり強引な家庭復帰を望む生徒も現れる。児童養護施設には、家庭生活に近づける思いはあっても共同生活であるため、生活を営む上でのルールを持っている。子どもたちにとっては家である施設のルールが、各家庭にある当たり前のようなルール（門限、小遣い他）とかけ離れていないか、そのルールには子どもたちの意向も反映されているのか、子どもたちが納得できないと思っているルールについての説明がきちんとなされているのかについて、サードプレイスからの見守りや施設側への確認、施設と生徒との仲介を行う。また、学校は社会的養護施設に関し、まだ十分に理解されていないこともあり、SSWrが間に入り双方の状況を説明する

ことで、教育環境、施設環境がお互いに見えやすくなる。生徒、保護者、児童相談所、施設、学校で話し合いながらも、生徒自身の学校や施設に対する思いが途切れ、中途退学を選ぶ生徒を防ぐことのできないケースがある。中途退学者に対し、今後困難な状況に遭遇した際に助けを求め術を知らせられればよいが、それすらできず事務的に退学手続きが進められることもある。

2. 複合的な生活課題の中で一時保護に揺れる事例

①の事例について、さらに詳しく支援の展開を示していく。

(1) 介入の端緒

H. 26年×月×日

教育相談担当教員に、担任、養護教諭より「発熱や胃部の痛みを頻繁に訴え、保健室利用をする生徒がいる。何かあるのではないか。」との連絡が入り、SSW_rが介入することとなる。初回の面接から、抵抗感を示すことなく家庭や母の状況を話す。「母が、何もしていないのにいきなり『何やってるの!』と言って叩いたり『お前なんか生まなければよかった』と言う。叩かれる場所は頭や顔、手の甲が中心。でも、母はすぐに忘れて寝てしまう。自分も体調が悪く、どうしたらいいのかわからない。熱には耐えられても胃の痛みは無理。」と言う。身体に関し早急な受

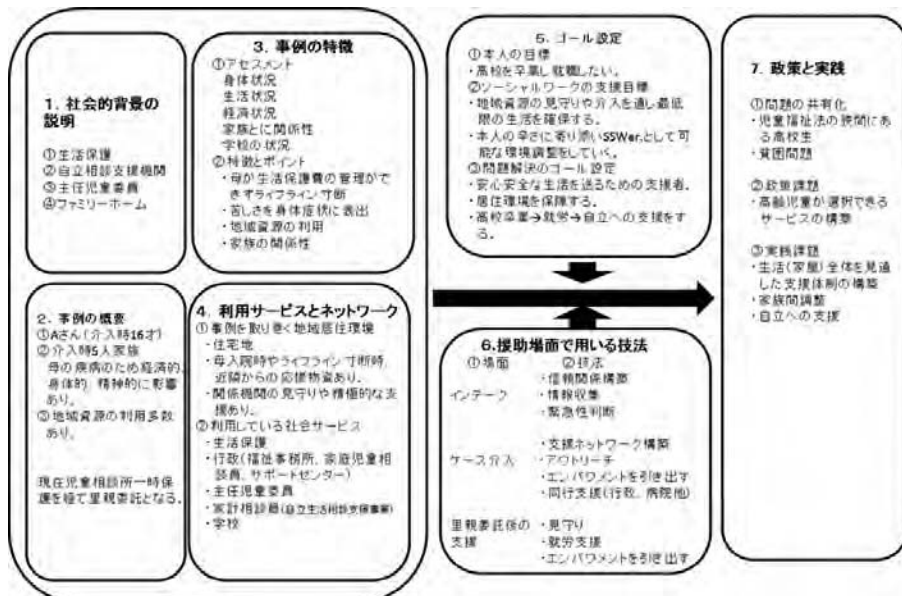


図1 ソーシャルワーク事例研究会 (2014)『ソーシャルワーク事例研究の理論と実際—個別援助から地域包括ケアシステムの構築へ』P12を参照にして筆者作成

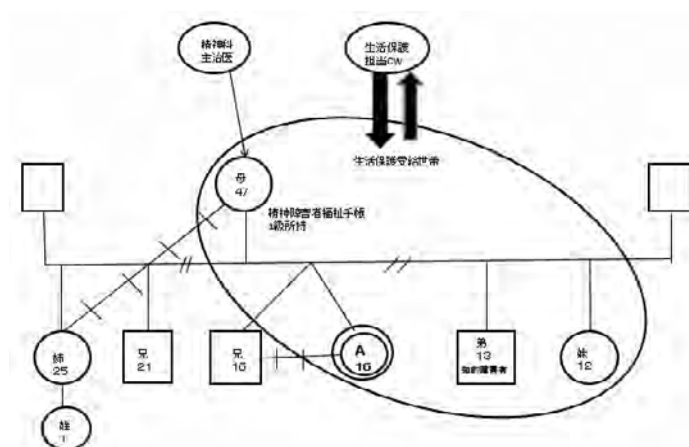


図2 エコマップ SSWr導入前 H.26.5

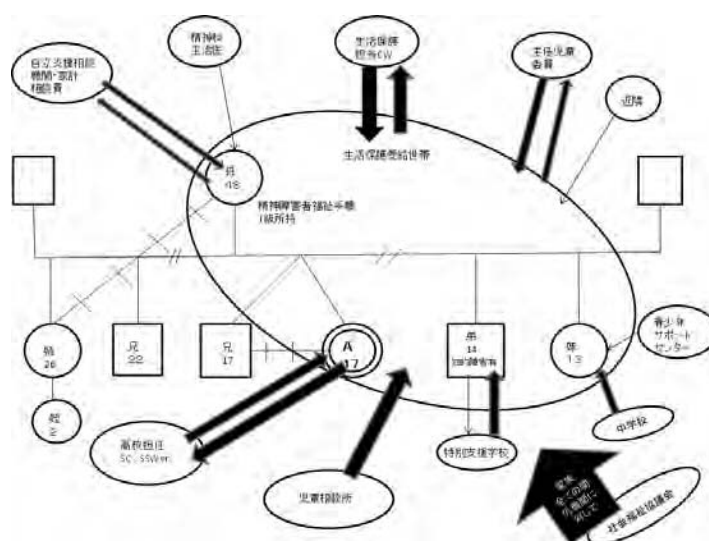


図3 エコマップ SSWr導入後 H.27.4

診が必要と判断し、検査のできる総合病院を受診する（SSWr同行）。異常なしとの診断を受け、その際精神科受診の必要性も促される。

(2) 支援の展開

・ H.26年×月×+35日

Aの身体的・精神的な苦痛に関し、機能的な問題ではないことが判明された。このままの生活を維持することはAにとって不利益になることを、生活保護担当ケースワーカー（以下、「生活保護CW」とする。）、家庭児童相談室相談員（以下、「相談員」とする。）、学校とで話し合い、

児童相談所に虐待通告をする。一時保護となるが、約10日間で母親が退院したため、家庭引き取りとなる。また、Aには面接の中で、今までつらい状況の中頑張ってきたが、これは学校として児童相談所に虐待通告をしなければならない状況であること、児童相談所や一時保護の説明、その後の選択肢の説明をしたところ、Aも「今の状況より良くなりたい」と納得する。Aの意向を確認し、SSWrは母の精神的疾患が要因であったとしても、Aやきょうだいにとっては身体的・心理的虐待であり、不適切な養育環境であるため、児童相談所に虐待通告をした。しかし、児童相談所は養育者不在のための養育困難として、母が退院したことにより主訴が解決したとの判断となった。これはAが自立可能年齢であることや、一時保護所での生活に苦痛を感じ、自ら自宅に戻ることを希望したことにもよる。児童相談所の家族間調整が継続指導としてなされていたわけではないため、今後は地域で見守ることが必要となることを感じた。

・ H. 26年×月×+90日

Aの身体症状は続き、Aと生活保護CW、相談員、SSWrで精神科受診について話し合う。Aの意向は「あまり行きたくない。お母さんみたいになるのはヤダし、変な人がいそうだし」と言うことであった。そこで、地域が主催している「専門医による心の相談」を利用する方法があることを知り、SSWrが母親とAに説明をするため、生活保護CWと家庭訪問をし、母親、A共に納得を得ることができた。精神科医からは「母親の精神状態がAの心身に影響を与えていることは確かだが、現在はエネルギーも感じられる状態である。落ち込むような時には周囲が受診を勧め、Aもそれを受け入れること」と言われる。学校では「今やれている自分」を認めながら見守りを続ける。

・ H. 26年×月×+180日

修学旅行では、旅先で不調を訴え（発熱、痛み、歩行困難）、別行動をとる。一週間後、母は精神科病院へ再入院となる。生活状況を確認し、子どもたちで可能なことや必要となる支援を見極め、連携をとるために家庭訪問を実施（担任、SSWr）する。高校生、中学生の子どもだけの生活になるが、一時保護に対し、きょうだい3人とも強い拒否感があるため、在宅で地域が見守ることとなる。この時の家庭状況として、食料がない、手持ち金がない、ライフラインが止まる寸前、携帯が止められ連絡手段がとれない状況にあった。生活保護CW、主任児童委員、学校、市委託家計・自立支援相談員がそれぞれの立場でできる支援を集結させ、フードバンクも利用し、母が退院するまでの半月を乗り切る。子どもたちは母が治って帰ってくると思っていたが、実際は入院前より多少落ち着いた程度であり、Aは「もう少し良くなったと思った。お母さんがおかしいことを言っても、受け流せるようになってきたけど……」と言うが、「でも、たまるんだよね。」と胃のあたりを指さす。

・ H. 26年×月×+200日

第1回ケース会議開催（子ども支援課，家庭相談員，生活保護CW，家計相談員，主任児童委員，中学校教頭，高校担任・教頭，SSWr）

関係機関で持ち得ている情報を共有し，A家族を地域支えしていくことの共通認識を持ち，連携を取り合える関係をつくる。

・ H. 26年×月×+220日

家庭訪問実施（家計相談員，SSWr）

母退院後の生活状況の確認と，家族全員の家計管理が適切に行われているか確認をする。

・ H. 26年×月×+240日

家庭訪問実施（生活保護CW，家計相談員，SSWr）

生活状況の確認と生活保護費支給方法の相談。Aのアルバイトについての相談をする。

・ H. 27年×月×+270日

家庭内の状況が再び悪化し，手持ち金や食料が尽きていると言うAからの訴えあり。生活費に充てるためと言ってアルバイトを始めるが，なかなか覚えられないこともあり辞める。弟・妹が不登校気味になりピアスをあけたり，飲酒・喫煙も生じ，家が中学生5～6人のたまり場になっていることを心配する。金銭管理に関しては家計相談員，生活保護CW，弟妹のことは中学・サポートセンターに連絡をし，関わりを依頼する。継続して主任児童委員の見守りあり。

・ H. 27年×月×+280日

Aより「中途退学をして，家族のために働こうと思う。」との意向あり。現在の状況をAと確認し，具体的な見通しを一緒に考える。目の前のことではあるが，あといくらあれば当面の生活は可能か，そのために保護費をどのように使用するのか数字をあげながら確認をし，中途退学は最終手段であり諦めないことを伝える。Aの表情からは疲弊感が強まっていることを感じ，SSWrは，児童相談所に助けを求めるようAに話したが，「一時保護所より今の方がまだまし。」と答えるAの気持ちを尊重し，説得ができなかった。

・ H. 27年×月×+310日

第2回ケース会議開催（生活保護CW，家庭相談員，家計相談員，主任児童委員，青少年サポートセンター職員，中学校頭，高校教頭，SSWr）

保護者の監護能力が低下しており，弟妹に非行傾向が見られ始めたことや，生活費がなくなる

ことに関し、それぞれの立場でできる支援を確認する。

・ H. 27年×月×+360日

母の状態がさらに悪化しているようで、「意味のわからないことを言ったりトイレの失敗もあり、どうしたらいいのかわからない」とAからの訴えあり。Aはそのような母の姿に対し「わかっていてもあるから、きっとできなくなっていることにに対し、悔しいと思う。失敗した下着をゴミ箱にすてていることもあるし……可哀想」と言う。生徒の言葉から、母親を冷静に見る力が備わっており、困っていることは事実だがそれでも母親を丸ごと受け止めていこうとする姿勢が見られるとSSWrは感じた。

・ H. 27年×月×+380日

なぜかなくなる金銭や、家事、母の状態、弟や妹の不登校・非行のおそれにA自身「疲れた。もう限界。児童相談所に行きたい。」と言う。SSWrが母の状態や思いを確認するために家庭訪問をし母に会うが、途中から混乱し話が噛み合わなくなる。母の気持ちとしては「自分がこのような体になってしまい、子どもたちに申し訳ない。子どもたちが頑張って家事をやっているのに、できない自分が情けない。見ているのが辛い」と言う。また母から、「これではどうしようもないので、子どもたちを施設のような所をお願いして自分が治るまで育ててもらいたい。」との意向が出る。公共料金未払いのため、ライフライン3本止まる。

・ H. 27年×月×+390日

母は福祉サービス（ヘルパーによる家事、外出等の支援）の利用を好まなかったため、家計相談員や主任児童委員が通院診察、児童相談所への相談等に付き添う。家庭訪問実施（家計相談員、担任、SSWr）し、子どもたちが一時保護となっても学校は児童相談所と協力し支えていくので、安心して治療に専念してもらいたいことを母に伝える。総合的な情報と意向を、関係者、児童相談所に伝え、協議の末、きょうだいは一時保護、母は入院となる。児童相談所の会議の結果、一時保護が決定しこれから児童相談所職員が迎えに来ることをAに知らせると、表情に安堵感が見られ、「一時保護所は嫌だけど、今の生活に比べれば、ご飯も食べられるし明日はどうしようと思わなくて済む。」と答える。かなり拒否感の強い一時保護所ではあるが、生きるための衣食住を保障するためには仕方ないと自分自身で決め、納得させている様子がうかがわれた。

約1ヵ月間の一時保護の後、Aは18歳の誕生日前日に里親委託となり、安心安全な環境の下、高校に通っている。

(3) 事例の特徴

①アセスメント

- ・ 身体状況……………胃～腹部の痛みや手の冷えを訴える以外は良好である。
- ・ 精神的状況……………生活面の不安定さからくると思われる身体症状の他は表面に出ず、揺れは少ない。
- ・ 生活状況……………自立している。服装、整容等自己管理ができています。身辺整理、食事作り等、家事能力あり。
- ・ 経済状況……………生活保護受給世帯である。本児自身に浪費傾向は見られないが、母が生活保護費の管理をすることができず、食費や種々の支払いに事欠き「食べ物を買うお金、バス代がない」との訴えを繰り返す。アルバイト（コンビニ）をするが、1～2ヵ月で辞める。（バイト料は新聞代に使う）
- ・ 家族との関係性…経済的に困窮しても、母や弟・妹の生活状況が悪化しても、思いやる気持ちは続いており、「自分がしっかりしなければ」「病気だから仕方ない。可哀想」「非行にならないでほしい」という言葉を口にする。家族の危機に対し、家を出ている兄姉たちが心配をするが、両者ともに頼れる環境にない。
- ・ 学校での状況……問題行動は見られず、落ち着いて生活をしている。書道部部長を務め、展覧会では賞を受け、本児の自信となっており、母もそれを自慢に思っている。真面目に授業を受けているが、成績は中～下位である。「家にいたくない」と言い、7：00前から登校し18：00前後まで学校内にいる。困難な生活状況を担任やSC、SSWrに伝え、助けを求めることができる。

②ケースの振り返り

本ケースは、生徒が自分の困り感を外に発信することができ、親子共に必要な連携や支援の受け入れを拒まなかったため、介入しやすい状況であった。この点について、親子に対し、「困っていることを何とか解決し、自分たちの生活をより良くしていこうとする前向きな気持ちが伝わり、将来を考えていく姿勢で生活していることがわかる」と評価をした。高齢児童であっても、養育者不在の状況や、ライフライン寸断の状況の中で生活するということは、あきらかに児童相談所に通告するケースである。しかし、Aは前回の一時保護でルールの厳しさ等を経験したことにより、「水は公園から汲んでくる」「電気は懐中電灯」「食料はカップラーメンをよく噛めばいい」と言い、一時保護されることを拒み続けた。児童相談所も「Aは『一時保護所にはもう絶対に行かない。』と言って退所したので、拒否している高齢児童を無理矢理保護することはできない。」と言う。生命の危機になりかねないことをAにも児童相談所にも伝え続けたところ、

A から「もう限界」という言葉が聞かれ、A 自身が児童相談所に助けを求めたことにより、ようやく一時保護となる。本ケースの場合、A の意向、児童相談所の判断の間でSSWrとしてどう関わるべきであったのか、「このような劣悪な状況でもAの意向を尊重してよかったのか」「強引に一時保護を説得し、安全な環境を与えるべきではなかったのか」「児童相談所に強く危険性を訴えるべきではなかったのか」、最善の利益を考えた場合何を優先すべきか悩み、課題が残る。18歳までという時間的制限のある生徒に対し学校、SSWrだけで支えることは不可能なため、公的資源から開拓を始めるが、SSWrの認知度が低く、どのような役割を担っている存在なのかということから説明し、顔の見える関係を続けることで、ようやく信頼を得ることができるようになった。A 本人に関わること、母に関わること、家族全体として関わること、金銭問題など、それぞれ専門的な地域資源を一ヶ所でも多く開拓し、連携をとりながら支援を進めたいと考え、SSWrが軸となり、ケース会議開催や情報共有を積極的に行っていた。

しかし、週 2 日の非常勤SSWrでは時間的にも限界がある。地域連携を目標にしても、それぞれの支援が点のままで面にならないもどかしさと、SSWrが軸として適役なのかという違和感を感じていた。支援が後半にさしかかった時に、ようやく社会福祉協議会地域コミュニティ担当と言う部署の存在に気がつき、コミュニティソーシャルワーカー（以下、「CSWr」とする。）⁹⁾ と出会うことができた。本ケースはまさしく地域に根ざした専門的視点からCSWrが関与すべきであり、軸をSSWrからCSWrに移行したことで、一つひとつの資源の持つ役割が明確となり、面として支援に厚みが出てきた。

終結までに2年近く要したケースだが、生徒自身が自分の問題として取り組めるよう支援してきたことで、生き抜く力を学んだのではないかと考える。前述したが特にライフラインが止められた時、良好な方法とは言えないがAを中心にきょうだいで協力し一時保護をせず急場をしのぐための手段がとられた。その際のSSWrの支援として、Aを見守りながらきょうだいでやるべきことやできること（学校から文化祭用のカセットコンロやライトを借りる。今ある食材を確認し、どのようにしたら食べられるのかを知らせる。コンロやライトの無駄を防ぐため、きょうだいが同じ時間に食事をする他）、行政の力（生活保護費の一部前途支給、福祉資金等の可能性）を借りた方がよいことを整理し、向き合わなければいけない生活課題に優先順位をつけ、SSWrはいつも近くで支えるが、主体となって動くのはA自身であるというメッセージを発信し続けた。当初学校は、「SSWrは何をしてくれるのだろうか」と半信半疑であったが、支援の展開方法や、生徒自身の問題として関わるSSWrの姿勢から、福祉的な視点の重要性、チーム学校⁷⁾としての在り方を周知できたようである。SSWrが学校に根付き、信頼関係が築けるようになるためには、SSWr自身も専門性を磨く必要性があり、筆者の今後の課題として取り組んでいきたい。

3. 考察—高校におけるSSW実践から見えてきた課題—

(1) SSWrの実践をより良くするためのミクロレベルの課題

①SSWrの自己研鑽

生徒の個別事例にアプローチするためには、どのようなソーシャルワーク技術や専門性を身につけることが必要なのだろうか。力量と専門性を高めるためには、自己研鑽が欠かせない。自治体にもよるが、公的な研修制度は少なく（筆者の場合なし）、自分から求めて行かなければならないのが現状ではあるが、目の前に子どもがいる以上、自己研鑽に努めつつも、公的研修の必要性やスーパーバイザーを要望する声を上げていく必要があると考える。

②地域資源や福祉サービスを知る

地域にあるフォーマル・インフォーマルの社会資源を開拓し、顔の見える信頼関係を構築しておくことが、速やかな連携を行う上で必要となる。①に示したことと関係するが、資源やサービスの内容、できること、できないことをSSWrが学び、理解をしておくことも、環境への働きがしやすくなる方法である。

(2) SSWrの実践をより良くするためのメゾレベルの課題

①地域との連携

調整・仲介・連携というソーシャルワーク機能を持つSSWrが、生徒をいかに適切な地域資源につなぐことができるかが課題となる。SSWrが、フォーマル、インフォーマル資源の存在や活用方法を理解できているかということである。適切な資源につなぎ、点である資源と資源が結びつき、ネットワークという面になって生徒を支えていかなければならないと考える。また、新たな資源として、自立相談支援機関との連携が文部科学省より示された。文部科学省より平成27年3月27日に出された「生活困窮者自立支援制度に関する学校や教育委員会等と福祉関係機関との連携について（通知）」によれば、自立相談支援事業を行う自立相談支援機関の相談支援員等とSSWrは日頃から情報共有を行い、生徒家庭の経済状況を背景とした中途退学を未然に防ぐことが重要とある。生活困窮者自立支援制度では、本人の状況に応じた包括的な相談支援が行われるが、法に規定されていない支援（NPOによる居場所づくり、学習支援等）も取り組まれ始めているので、SSWrにはインフォーマルな支援を適切に利用できるような情報収集力も必要となる。

②学校内での相談体制

学校内の相談体制としては、教員からニーズを引き出すことも大切であると思われる。義務教育とは異なり、高校での教員との関わりは担当教科や学級会活動が中心となるため、生徒と教員

の間に必然的に距離が生じる。その中で、一人ひとりの異変や困り感をキャッチするには教員自身の気づきが重要となり、それにより早期発見につながる。米村（2011：66-67）は2008年、三鷹市学校教員に対するアンケート調査結果より、「教員は教育を行う上で児童、生徒の問題の背景も考え分析しており、実際に工夫しながらアプローチを行っている。しかし、教育現場で報告される複雑多様な福祉課題に対し、各教員が個別的に対応することは物理的にも専門的にも限界にきている。」と述べている。逗子（2012：27）は教員の実態を「仕事に対する使命感が強く、その思いから仕事を抱え込んで忙しくなり、ストレスを抱え込んでいる」とし、その原因として「子どもの問題の多様化」「保護者の学校への不満足度」をあげている。しかし深刻な学校現場ではあるが、子どもの最善の利益を考えた場合、いつも生徒の身近にいるのは1週間に2日勤務のSSWrより教員である。早期発見、早期介入をすることで少しずつでも課題に好転が見られるようになることを教員に理解してもらい、そのためのニーズキャッチのポイントをまず知らせていくことが校内相談体制を整えるためのSSWrの役割であると考ええる。

(3) SSWrの実践をより良くするためのマクロレベルの課題

① SSWrの増員と常駐配置

SSWrの増員と常駐配置を制度化することである。「チームとしての学校・教員の在り方に関する作業部会」¹⁰⁾では検討されており、「いじめ対策等総合推進事業」¹¹⁾「学校をプラットフォームとした総合的な子どもの貧困対策」¹²⁾は予算化されている。また、日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会¹³⁾も配置拡充の要望書を文部科学省に提出している。これらが実現されることにより、SSWrの支援は必要な生徒に届きやすくなると思われるが、義務教育である小中学校、特別支援学校が配置対象の中心であり、高等学校に関しては別枠になっている。「スクールソーシャルワーカー活用事業」¹⁴⁾によると、平成27年度予算案647百万円の中では、「高等学校のための配置94名、質向上のためのスーパーバイザー配置47名」となっている。児童福祉法の対象でありながらも、義務教育時期と比べると福祉サービスの利用が難しくなっている高校生だが、心理的・社会的にはまだまだ未熟である。本人の自己決定ができるよう情報を提供し、将来の見通しを立てることに寄り添い、環境との折り合いのつけ方を一緒に考えていく高校生にとって、義務教育と等しいSSWr配置が必要であると考ええる。

② 18歳が受けられる公的サービスの拡充

18歳が児童として、個々に応じた必要なサービスを公的に受けられることが安心した自立につながれると思われる。既存の社会的養護施設の有効活用や里親の活性化、自立援助ホームの拡充、文部科学省「学校をプラットフォームとした総合的な子どもの貧困対策」¹⁵⁾の中にある学習支援・家庭教育支援として「フリースクールを含めた学校外の不登校支援施設・機関による指導体

制の在り方に関する調査研究」¹⁶⁾により、今後フリースクールの存在も期待される。高校にも補習指導員が派遣されたり、多様な学習支援やキャリア教育の充実により、就学の継続や就労支援が可能になると考える。

貧困からの脱却と、自立した社会人を目指すための公的メニューは増えつつあるが、まずはそれらを使いこなせる人材（SSWr）や生徒の異変をキャッチできる・生徒が発信できる校内環境の整備が最優先になると考える。何らかの課題を抱えた生徒が、SSWrの存在を知らず、会うことなく中途退学をすることで、生徒自身の人生に不利益が被らないよう、SSWrや周囲の大人たちと生徒が、解決・改善に向かうために努力をする機会が必要である。自分や家族のことを一緒に考えてくれるSSWrの存在は特別ではなく、いつも手の届くところにいることが当たり前となるよう、高校に対しても配置型SSWrの増員が早急に望まれる。

注

- 1) 文部科学省（2008）「スクールソーシャルワーカー実践活動事例集」 SSW事業の背景や概要、実践について明記されている
- 2) 厚生労働省福祉行政報告例（2014）
（http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/14/dl/kekka_gaikyo.pdf 2016.3.30）
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局（2009）の報告より
- 4) 前掲1)
- 5) 文部科学省（2008）「スクールソーシャルワーカー活用事業」によりSSWrが本格的に導入される。「スクールソーシャルワーカー活用事業実施要領」には、職務内容や資格が明記されている。
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/046/shiryo/08032502/003/010.htm 2016.2.15）
- 6) 文部科学省（2013）「学校基本調査」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1334827_6.pdf 2016.2.15）
- 7) 総務省統計局（2012）「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
（www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016708 2016.2.15）
- 8) プルスアルハ 細尾ちあき（2013）『お母さんどうしちゃったの…… —統合失調症になったの前篇—』ゆまに書房 精神疾患の親をもつ子どものために作られた絵本。幼児にもわかりやすく描かれている。
- 9) コミュニティソーシャルワーカーとは、生活が困難な家庭や家族など、支援を必要としてい

る人や地域に対しての援助を通して、地域と人とを結び付けたり、あるいは生活支援や公的支援制度の活用を調整するためのコミュニティ・ソーシャルワークを実践する人。

- 10) 「チーム学校」とは、教員の専門性だけでは対応が困難になっており、多様な専門スタッフを配置し、様々な業務を連携・分担してチームとして職務を担う体制である。文部科学省「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」「チームとしての学校・教員の在り方に関する作業部会中間まとめ」（2015.7.3）において、具体的な改善方策として、教育以外の専門スタッフの参画が講じられている。

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/052/index.htm 2016.2.15)

- 11) 文部科学省「いじめ対策等総合推進事業」（2015）早期発見・早期対応のために外部専門家SC.SSWrを活用した教育相談体制の整備・関係機関との連携を強化するとある。

(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/08/28/1351651_4.pdf 2016.2.15)

- 12) 文部科学省「学校をプラットフォーム」とした総合的な子どもの貧困対策」（2015）学校を子供の貧困対策のプラットフォームと位置付けて、「つなぐ」をキーワードに5つの「充実する」対策を推進。

(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2015/01/21/1354606_4.pdf 2016.2.15)

- 13) 公益社団法人日本社会福祉士会会長鎌倉克英 公益社団法人日本精神保健福祉士協会会長柏木一恵（2015.3.16）文部科学省初等教育局児童生徒課2014年度要望書「スクールソーシャルワーカーの配置について」

- 14) 前掲5)

- 15) 前掲12)

- 16) フリースクールを含めた学校外の不登校支援施設・機関による指導体制の在り方に関する調査研究：国内外におけるフリースクール等の教育制度及び運用の実態について調査を行い、今後の位置付け等について検討を行うとともに、学校復帰や社会復帰を支援しているフリースクールを含めた学校外の不登校支援施設・機関による指導体制の在り方に関する先進的調査研究を実施する。

引用文献

阿部彩 2011『子どもの貧困』岩波書店, 150-15.

安部計彦 2011「要保護児童対策地域協議会のネグレクト家庭への支援を中心とした機能強化に関する研究」こども未来財団.

朝比奈なお 2011『見捨てられた高校生たち 知られざる教育困難校の現実』学事出版, 41.

- 福岡麻紀 2013「高校におけるソーシャルワーカーの役割—取り組みの視点による考察—」『北海道大学教育福祉研究』第19号, 3.
- 大友秀治 2015「エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク—現場で使える教育行政との協働プログラム—」山野則子編著 明石書店, pp24-33.
- 鈴木庸裕, 鹿島丈夫, 宮地さつき 2009「スクールソーシャルワーカーの業務と学校支援 (2)」福島大学総合教育研究センター紀要第7号.
- 佐々木千里 2012「よくわかるスクールソーシャルワーク」山野則子, 野田正人, 半羽利美佳編著者, ミネルヴァ書房.
- 山下英三郎 2012 P59 中央法規「スクール(学校)ソーシャルワーク論」内田光司 宮島喜輝 山下英三郎 山野則子 編集, 監修 日本社会福祉士養成校協会.
- 米村美奈 2011「スクールソーシャルワーカーの実態と今後の課題」—東京都三鷹市における調査から見てきたもの— 国際経営・文化研究vol.16 No.1, pp66-67.
- 逗子健一 2015「エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク—現場で使える教育行政との協働プログラム—」山野則子 編著, 明石書店, p27.

参考文献

- 青砥恭 2009『高校中退』ちくま新書.
- 小川恵 2013『対人サービス職のための精神保健入門』日本評論社.
- スクールソーシャルワーク研修 2009.12.5 社団法人日本社会福祉士会研修資料.
- ソーシャルワーク事例研究会 2014『ソーシャルワーク事例研究の理論と実際—個別援助から地域包括ケアシステムの構築へ—』中央法規.
- 高良麻子, 佐々木千里, 鈴木庸裕ら 2014『子どもが笑顔になるスクールソーシャルワーク 教師のためのワークブック』かもがわ出版.
- 山野則子編著 2015『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク 現場で使える教育行政との協働プログラム』明石書店.
- 吉永恵子 2015「定時制高校に配置されたソーシャルワーカーから見えるもの—実践から考えるスクールソーシャルワークの課題と可能性—」『CAP ニュース』第96号 社会福祉法人子ども虐待防止センター.

The Challenges We Found in Social Work Practices in Senior High School

Chizuko HATSUGAI

This paper aims to compile and study the challenges involved in school social work (hereafter, SSW) in senior high schools based on practices the author engaged in as a senior high school social worker (hereafter, SSWr). The current situation in senior high schools is plagued with several challenges often in relation to the surrounding environment, such as the reasons for more than half of the school dropouts being economic reasons and troubled households, as opposed to awful deeds the students themselves might have committed. After the completion of compulsory education, services available to students, now considered to be socially independent, have become limited. To foster independent members of the society and support students in their many life challenges, adopting an approach that differs from the one in compulsory education is important. The various micro-level issues observed from the senior high SSW case studies and practices point to a need for expert methods to develop individual support to students. At the meso level, there is a need for a counseling system within schools and network building in collaboration with the local community. At the macro level, there is a need for additional fulltime SSWr staff.

Keywords: school social work, school dropouts, poverty, school counseling system, local collaboration